地方文化発信のための通訳案内士を対象としたインタビュー：大学間協働学習に向けて

津　田　晶　子[1)]　　金　志　佳代子[2)]

Research on Interviews with Licensed Guide Interpreters for Regional Cultures: Towards Collaborative Learning among Universities in Japan

Akiko Tsuda [1)]　　Kayoko Kinshi [2)]

（2021年12月１日受理）

０．大学間協働学習のねらい

協働学習（Collaborative Learning）とは、学習者が協力し合いながら問題を解決し、課題を完了し、新しい概念を学習する教育的アプローチである。協働学習を行う学習者は、課題に取り組むために必要な社会的スキルをある程度習得している「責任ある参加者」(responsible participants）であるとされる（Matthews, Cooper, Davidson & Hawkes, 1995)。

本研究は、この協働学習のアプローチを取り入れ、異なる３つの地域の大学で学ぶ学習者が、Ｅメールによる情報交換を通じて、互いに学び合い、他者への理解を深めることを目的とした共同研究の予備調査である。また、Ｅメール・ライティングによって英語で伝える方法を学ぶことで、コミュニケーション・スキルの習得を目指すものである。

本稿執筆中の2021年には、新型コロナ感染症禍で、海外渡航が困難になり、大学生が海外に留学したり、交流活動をしたりという活動が困難になっている。インターネットを使って海外の大学との交流行事の試みも報告されているが、時差の問題や使用しているプラットフォームの違いなどで、実際には難しい点もある。

国内の地方の大学の学生が「英語で」交流するプログラムでは、日本在住の教員が学生の特性や英語のニーズを知っているため、より細かな指導ができると考えられる。

１．調査の背景

本研究は、国家資格である通訳案内士（英語）を対象とした半構造化面接を行い、地方文化に関する知見を得るものである。本研究の予備調査として、2019年から2020年にかけての４か月間、兵庫県、福岡県、沖縄県の大学生（日本人学生）がＥメール交換を中心とした大学間協働学習を行った結果、学生たちが限られた範囲の知識・情報をもとに地方文化を発信していることが確認された。本稿で扱う「協働学習」は、「学習者の自律を最終目標とし、互いに情報提供し学び合うことによって各自の思考や理解を深め、それぞれのゴールを目指す」（関田, 2017）ことを定義とする。つまり、協働学習では、学習者が中心となって活動を進め、教師はファシリテーターに徹する。また、「多様な仲間との相互行為に基づく学習経験を通じて、自らの頭で考えることを学び、他者への理解を深め、批判的思考力を育む」効果があるとされている（津田, 2015)。したがって、学習者が与えられた課題（タスク）を達成するためには、事前に予備知識となるソーシャルスキルを習得しておくことが前提となっているため、必要に応じて学習者に情報を提供することが効果的である。

また、2008年から2020年までを対象に、科学研究助成研究課題として採択された観光英語にかかわる研究９件を調査した（津田・金志、2021)。その結果、１）日本の大学生あるいは地域住民、観光サービス従事者を対象とした研究が中心であること、２）一つの道府県内という地域に限定された観光重視の研究であること、３）職業としての通訳ガイド育成のための教材開発を目的としていること、といった共通点が見られた一方で、「地方からの英語による発信」、さらに、「外国人留学生も対象とした観光英語のニーズ」という視点を重視する必要性が明らかになった。

これらのことから、本研究では、執筆者らが研究対象とする兵庫県、福岡県の二県に焦点をあて、各県の観光事情に精通する通訳案内士が、外国人に勧める日本事象についての情報収集を行い、今後の大学間協働学習の教

執筆者紹介：１）中村学園大学栄養科学部フード・マネジメント学科　　２）兵庫県立大学国際商経学部
別刷請求先：津田晶子　〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1　E-mail：atsuda@nakamura-u.ac.jp

材として活用することとした。まず、兵庫県と福岡県の通訳案内士に半構造化面接を実施し、それぞれの地域特有の観光場所、祭り、郷土料理、工芸などについての情報収集を行った。その結果、「インターネット検索だけでは得られない情報」や、「文化の異なる外国人観光客への対応方法」など、日本国内の異なる地方文化に暮らす学生同士の e-mail を通じたコミュニケーションにも活用できる多くの知見が得られた。本発表では、通訳案内士へのインタビュー・データを分析した結果をもとに、兵庫県、福岡県のそれぞれの文化的背景について考察し、今後の大学間協働学習の教材となりうる可能性について報告する。

2．研究方法

⑴ 調査対象者

兵庫県、福岡県の各県で、現地の事情・文化に精通している観光英語のプロフェッショナルである通訳案内士を調査対象者とした。通訳案内士は、語学力だけでなく日本の歴史、地理、文化、政治、経済、国際時事など、幅広い知識が求められる最難関の国家試験である。対象言語は、英語、フランス語、スペイン語など10言語であるが、今回は、英語の通訳案内士を対象とした。選考にあたって、各県の通訳ガイド協会の協力を得て、協会に登録されている通訳案内士を対象に募集を行ったところ、兵庫県（大阪府在住者１名含む）より６名、福岡県より10名の通訳案内士（英語）の方々にご協力いただくことになった。

⑵ 調査方法

2020年８月、Zoom によるオンラインを利用した半構造化面接を実施した。インタビューは、１名30分程度とし、それぞれの地域特有の観光名所、祭り、郷土料理、工芸などに関する質問項目について、事前に目を通してもらえるようにした。質問内容は、以下の５項目である。

１）「学生の国際交流を目的に、20代の留学生と日本人のグループを対象に１日、英語でガイドツアーをするなら、どういった行程にするか」
２）「おすすめの祭り・おすすめの郷土料理・おすすめの工芸」
３）「文化の異なる人に日本について説明する場合、気をつけていることは何か。（宗教、食事など）」
４）「外国人の出身国別の、日本への関心の違いについて」
５）「日本の文化や風習について、どのような説明が難しいか」

インタビュー時間に余裕がある場合は、追加質問として、「学校時代の英語の学習」についての聞き取りを行った。

インタビューを開始する前に、各調査対象者に対して、本研究の倫理的妥当性を考慮したうえで、個人情報の取り扱いには十分配慮し、調査上知りえた個人情報については漏洩がないよう、慎重な取り扱いを期すことを説明した。また、調査対象者には、事前に研究内容について十分に理解していただいたうえで、本研究への参加・不参加は自由意志であることを同意いただけた場合にのみ、インタビューに参加していただくことを確認した。

インタビューによって収集した情報は、KH Coder を用いて計量テキスト分析を試みた。兵庫県、福岡県それぞれのインタビュー内容から特徴語を抽出し、対応分析を行うことでデータの全体像を探ると同時に、今後の大学間協働学習における指導に、通訳案内士へのインタビューから得られた知見を活かすための考察を行った。

3．調査結果

⑴ 質問事項への回答結果

インタビューは、兵庫県、福岡県の通訳案内士に対して、５つの質問事項を基本に進めた。以下、質問項目⑴、⑵は各県別の回答例、質問項目⑶から⑸は両県の調査対象者から得られた回答の一部である。回答の太字は特徴語である。

１）「学生の国際交流を目的に、20代の留学生と日本人のグループを対象に１日、英語でガイドツアーをするなら、どういった行程にするか」

（兵庫県）
・姫路城→好古園→酒蔵見学→書写山圓教寺
・明石城跡→酒蔵見学→淡路島（伊弉諾神社）→鳴門海峡大橋（うずしお）
・布引の滝→異人館→海外移住と文化の交流センター→真珠会館→人と未来の防災センター→兵庫県立ミュージアム→メリケンパーク

（福岡県）
・太宰府（竈門神社、光明禅寺など）→博多ふるさと館、櫛田神社

２）「おすすめの祭り・おすすめの郷土料理・おすすめの工芸」

（兵庫県）
祭り：神戸まつり、灘のけんか祭り
郷土料理：明石焼き、神戸ビーフ、穴子どんぶり（姫路）
工芸：丹波の立杭焼、播州の打刃物、播州織、名塩の和紙

（福岡県）
祭り：博多山笠、博多どんたく、放生会、鶯替え（太宰

府)、鬼すべ（太宰府）
郷土料理：ラーメン、水炊き、明太子
工芸：博多織、博多人形

3）「文化の異なる人に日本について説明する場合、気をつけていることは何か。(宗教、食事など)」

(宗教)
・「**イスラム系**」の方が福岡に来る時に、絶対に豚がダメだとこっちが決めつけてしまわない。
・「**お祈り**」のスペース、メッカの方向は普段気をつかっている。

(食事)
・食事について、「**アレルギー**」があるかということは大事故につながるので、必ず聞いている。

(習慣)
・「**お参り**」**の仕方**をデモンストレーションしますけど、嫌だったら見ていてくださいね、**やらなくて良い**ですよと必ず言う。
・外国人にとっては、「**靴を脱ぐ**」ということは大仕事。
・お客様の国の文化と日本の文化はかなり違う事が多いので、違いを説明する時には、必ずその「**背景**」、**なぜっていうのを伝える**。

(その他)
・「**ジェンダー**」について日本での常識と海外での**常識が違う**。

4）「外国人の出身国別の、日本への関心の違いについて」

(欧米とアジアの比較)
・欧米の方の方が日本の「**文化**」にすごい興味があるし、アジア圏の方はどちらかと言うと「**ショッピング**」に興味がある。

(欧米豪)
・アメリカの方達は逆に歴史が短い分、とても日本のディープな部分、「**何千年前の歴史**」とかそういう所を深く関心のある方が多い。
・オーストラリアの方々は日本の自然、例えば雲、日本では「**山間から見える雲**」見えますよね、ああいう景色を向こうでは殆ど見たことがないので、ということで、自然とか雲の出来具合といったミステリアスな自然現象に興味がある方が多い。

(アジア)
・アジア圏の方達は、第２次大戦中に「**日本から受けた被害**」っていうのを意識していらっしゃるので、日本に来て、例えば原爆とかで日本が被害者という説明をすると、とても違和感があると思います。
・アジア系の人たちは、説明よりも、そんなこと、どうでもいい、日本に来て「**写真**」を撮って、これ食った、あれ食ったということのほうが大切なので。

5）「日本の文化や風習について、どのような説明が難しいか」

(説明の方法)
・パシッと当てはまる言葉っていうのがないことが多くて、すごく「**細かく説明**」しないといけない。

(習慣)
・靴を脱ぐということは皆知っているんですけど、「**どこで脱ぐ**」か。

(宗教)
・「**神道と仏教が共存**」してるって言うのが、すごく関心もあるし、理解してもらうのは結構難しい。
・欧米人にとって「**二つの宗教が共存**」することは考えられない。
・「**神道**」そのものが西洋の宗教のコンセプトには合致しない。

(ジェンダー)
・日本の「**男女の不平等**」、例えば西洋から見たら、いっぱいあるが、日本人は割と自覚してない面がある。

⑵　テキストマイニングによる特徴語と対応分析結果

質問項目⑴から⑸より得られた兵庫県、福岡県の調査対象者のすべての回答をデータとして計量テキスト分析を行った。表１から表３は、質問２）「おすすめの祭り・おすすめの郷土料理・おすすめの工芸」の調査対象者からの回答をもとに、兵庫県、福岡県別に分類し、各カテゴリーの上位10語の特徴語を示したものである。

数値は、どの程度「特徴的」であるかを示す Jaccard 係数である。Jaccard 係数は、例えば、語 a と語 b について、語 a もしくは語 b の一方のみを含む文書を分母とし、語 a と語 b を両方含む文書を分子として算出するものである。０から１までの値をとり、関連が強いほど１に近づく。0.2以上で特徴があり、0.3以上で強い特徴が表示される。

表1　おすすめの祭り

	兵　庫		福　岡	
№	抽出語	Jaccard	抽出語	Jaccard
1	神戸	0.833	山笠	0.800
2	薦める	0.833	思う	0.643
3	神社	0.571	博多	0.400
4	けんか祭り	0.500	どんたく	0.300
5	西宮	0.500	街	0.300
6	灘	0.500	勧め	0.300
7	お祭り	0.462	祇園山笠	0.300
8	地元	0.429	櫛田神社	0.300
9	月	0.375	見せる	0.300
10	お客	0.333	説明	0.300

表2　おすすめの郷土料理

	兵庫		福岡	
No.	抽出語	Jaccard	抽出語	Jaccard
1	薦める	0.500	ラーメン	0.700
2	明石焼き	0.500	郷土	0.600
3	海外	0.429	もつ鍋	0.500
4	料理	0.357	水炊き	0.500
5	思う	0.333	食べる	0.417
6	ステーキ	0.333	外国	0.364
7	タコ	0.333	日本	0.364
8	学生	0.333	一蘭	0.300
9	牛	0.333	勧め	0.300
10	魚介	0.333	刺身	0.300

表3　おすすめの工芸

	兵庫		福岡	
No.	抽出語	Jaccard	抽出語	Jaccard
1	兵庫	0.833	博多織	0.800
2	薦める	0.500	博多人形	0.600
3	丹波	0.500	体験	0.546
4	日本	0.500	財布	0.400
5	思う	0.455	実際	0.333
6	工芸	0.417	皆さん	0.300
7	作る	0.400	言う	0.273
8	行く	0.375	土産	0.273
9	お客	0.333	絵	0.200
10	感じ	0.333	勧め	0.200

次に、図１は、兵庫県、福岡県、それぞれにおいて、その特徴を把握するため対応分析を行った２次元散布図である。

原点（0, 0）から離れた語ほど特徴的であるとされる一方で、特徴のない語は原点付近に集中することが多い。円は語の出現回数によって大きさが変化することを表し、四角は、それぞれの対象（兵庫県、福岡県）を示している。

4．考　　察

第３節⑴の質問１）の回答より、20代の日本人と外国人留学生双方にとって、地域文化、歴史を学ぶことができる観光コースがあげられている。外国人観光客に対応されている通訳案内士として、各地域のランドマーク（兵庫県：姫路城、メリケンパーク、福岡県：大宰府など）をコースに入れながら、映画『ラストサムライ』の撮影場所にもなった書写山圓教寺（姫路）、日本神話の歴史が学べる伊弉諾神社（淡路島）などを入れることで、日本人学生、外国人留学生ともに関心を持ちやすいコースが紹介されている。

質問２）は、兵庫県、福岡県におけるおすすめの祭り、郷土料理、工芸についての回答である。第３節⑵の表１から表３は、それぞれの項目の回答から得られた特徴語が10位まで示されている。「おすすめの祭り」については、各県とも、祭りの名称（兵庫県：けんか祭り、福岡県：博多どんたく、祇園山笠）とあわせて、祭りが行われる地名・場所（兵庫県：神戸、灘、福岡県：博多、神社）、祭りで持ちいられる道具（福岡県：山笠）が上位にあげられている。「おすすめの郷土料理」では、各県で有名とされる兵庫県：明石焼き、ステーキ、福岡県：ラーメン、もつ鍋、水炊き、または店名（一蘭）が回答されている。最後に、「工芸」については、福岡県では、博多織、博多人形、財布が上位にあげられている。兵庫県では、ランク外ではあるが、11位に焼き物、13位に刃物（どちらも Jaccard 係数：0.333）が回答されている。

第３節⑴の質問３）から質問５）の回答の特徴については、３つの傾向に分類することができると考える。まず１つ目は「宗教」である。例えば、イスラム教の外国人観光客を案内する場合、食事、お祈りの時間・場所な

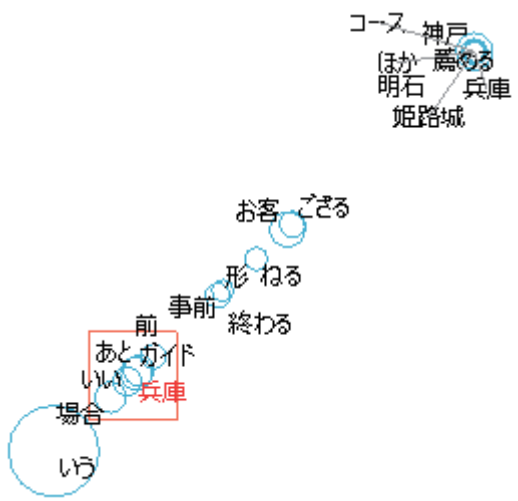

図１-a　対応分析（兵庫県）

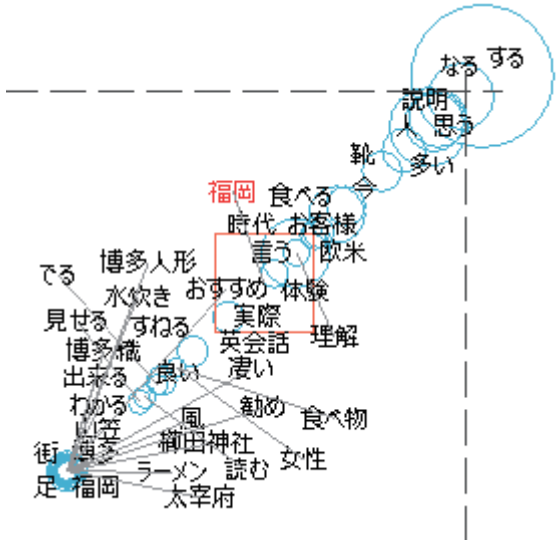

図１-b　対応分析（福岡県）

どに気をつける必要があること、また、日本の主な宗教（神道と仏教および神仏習合）についての説明を理解してもらうことが、しばしば困難であること、があげられる。次に、「日本の風習」である。兵庫県、福岡県と地域は異なる場合であっても、「靴を脱ぐタイミング」は、外国人観光客に理解して行動してもらうことが難しい状況として回答されている。最後に、「価値観」である。日本への関心事として、少数ではあるが、各出身国であまり差はないという回答がある一方で、欧米圏とアジア圏の観光客は、異なる目的、関心を持って来日する傾向がある。つまり、欧米圏からの観光客は、日本の文化、歴史に関心があるため、観光重視である一方で、アジア圏からの観光客は、買い物、食事をすることを目的として来日している傾向がある。

第３節⑵の図１は、兵庫県、福岡県の通訳案内士へのインタビューから得られた回答の対応分析である。兵庫県の場合、「兵庫」「神戸」「明石」などの地名が特徴語として出ており、一方、福岡県は「櫛田（くしだ）」「大宰府」、「ラーメン」「水炊き」「博多人形」のように具体的な地名や食べ物に関する発話が多いことがわかる。質問１）の観光コースにもあるように、兵庫県は、南北は淡路島のある瀬戸内海から日本海まで、東西は神戸市から姫路市を含む広い面積を有する県であることから、１日でまわるコースを想定した場合、神戸近辺、姫路近辺、あるいは日本海側の城崎近辺に関係する語が特徴語として抽出されていることがわかる。そして、福岡県の場合、福岡市と大宰府市に観光スポットが集中していること、また地域特有の特産物が特徴語として示されている。

５．調査の限界

この研究は兵庫県６人、福岡県10人と、比較的小規模な半構造化面接であったため、個人の経験にのみ基づく印象によるコメントも多い。そのため、より多くの情報を得るためには、質問紙調査による量的研究も必要と考える。

６．おわりに

本調査では、兵庫県、福岡県を活動拠点とする通訳案内士を対象に、日本事象についてのインタビューを実施した。インタビューで得られた回答内容は、日本人学生・外国人留学生が大学間協働学習を行うためのプログラムの教材として活用できるよう、計量テキスト分析を行った。大学間協働学習は、「自己紹介」「ホームタウン」「食」「祭りあるいは特産品」をテーマとしたＥメール交換を中心としたプログラムであり、異なる地域の大学で学ぶ学習者が、Ｅメールによる情報交換を通じて、互いに学び合い、他者への理解を深めることを目的としている。

本研究のインタビューによって得られた分析結果によって、大学間協働学習に参加する学習者は、以下の３点を事前に学んでおく必要があると考える。

１）それぞれ郷土の地理的、歴史的、文化的特徴、
２）外国人留学生たちの出身国、風習、宗教についての予備知識、
３）日本の文化、風習などについて英語で的確に説明するスキル

まず、自らが住む地域について学ぶことにより、学習者が交換するＥメールによる情報量が増え、英語によるライティング力の向上が期待できる。さらに文化背景の異なる学習者同士が、互いのことを予備知識として学んでおくことと同時に、的確な英語表現を用いて説明する方法を学ぶことでＥメールによるコミュニケーションをスムーズに進めることができる。本研究から得られた知見をもとに、教師がファシリテーターとして効果的にプログラムに関わることで、学習者中心の大学間協働学習プログラムがより充実することが可能になると考える。

このインタビューより、日本の大学間協働学習プログラムに必要な情報・教材内容が明らかになった。本プログラムでは、「地方からの英語による発信」を目的に、引き続き、日本人学生・外国人留学生間で行う大学間協働学習を実施する。プログラム内容は、学生が社会で使えるＥメールのエチケットやフォーム、フォーマリティーの指導からはじまり、与えられたテーマに沿ったＥメール交換に加えて、各自が音声によるメッセージと合わせて撮影したビデオ交換など、学習者が主体的かつ創造的に活動できる内容を取り入れる予定である。また、学生同士が交換したＥメールを中心とした英文は、テキスト分析を行い、語彙、文法、fluency（流暢性）などにおいて、学習者の英語力がどの程度向上したか、さらには、互いの文化を英語で学びあうことによる効果を検証する。これにより、本研究による日本の大学間協働学習をモデルプランとして公開することで、地域の実情に合致したオーセンティックな地方発信型の語学教材の開発を提案したいと考える。

謝　辞

本研究はJSPS研究費（JP 20K00864）「Cooperative Learning and Japanology: Development of an Intercollege Program for Japanese and International Students」（2020年度～2022年度）の助成を受けたものです。

調査にあたっては、一般財団法人九州通訳・翻訳者・ガイド協会、および特定非営利活動法人多言語センターFACILの協力を賜りました。心から感謝の意を表します。

参考文献

1）樋口耕一（2014).『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版, 京都.

2）Johnson, D. W., & Johnson, R. T.（2009）. *Circles of learning: Cooperation in the classroom*. Edina, Minn: Interaction Book Co.

3）Matthews, R. S., Cooper, J. L., Davidson, N., & Hawkes, P.（1995）. Building bridges between cooperative and collaborative learning. *Change: The Magazine of Higher Learning*, 27(4), 35–40.

4）関田一彦（2017).「アクティブラーニングとしての協同学習の研究」,『教育心理学年報』Vol.56, 158-164.

5）津田晶子・金志佳代子（2021).「科研費助成研究課題にみる観光英語の国内研究動向」,『中村学園大学・中村学園大学短期大学部　研究紀要』第53号, 63-66.

6）津田ひろみ（2015).「協働学習の成功と失敗を分けるもの」,『リメディアル教育』第10巻第２号, 143-151.